



# 1000人

で  
できること

海士町で暮らすみんなが一丸となつてはじめるまちづくり



# 21 地域と保護者と学校の連携プレーが大切です。地域が支える学校づくり。

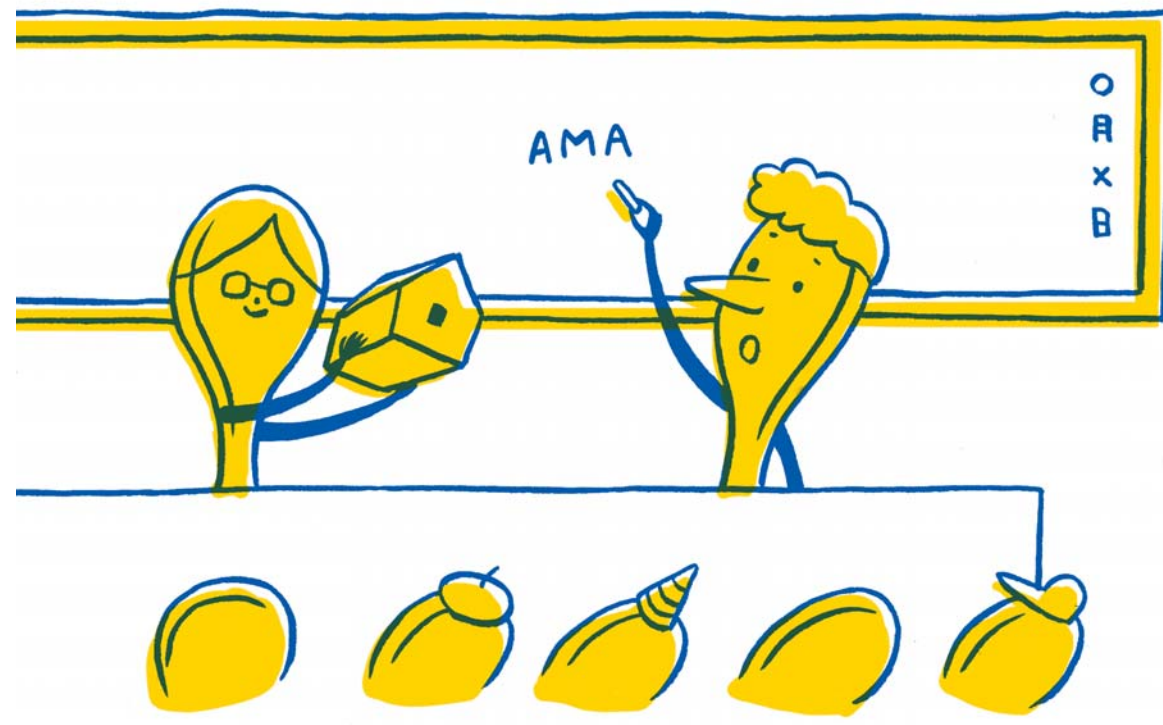
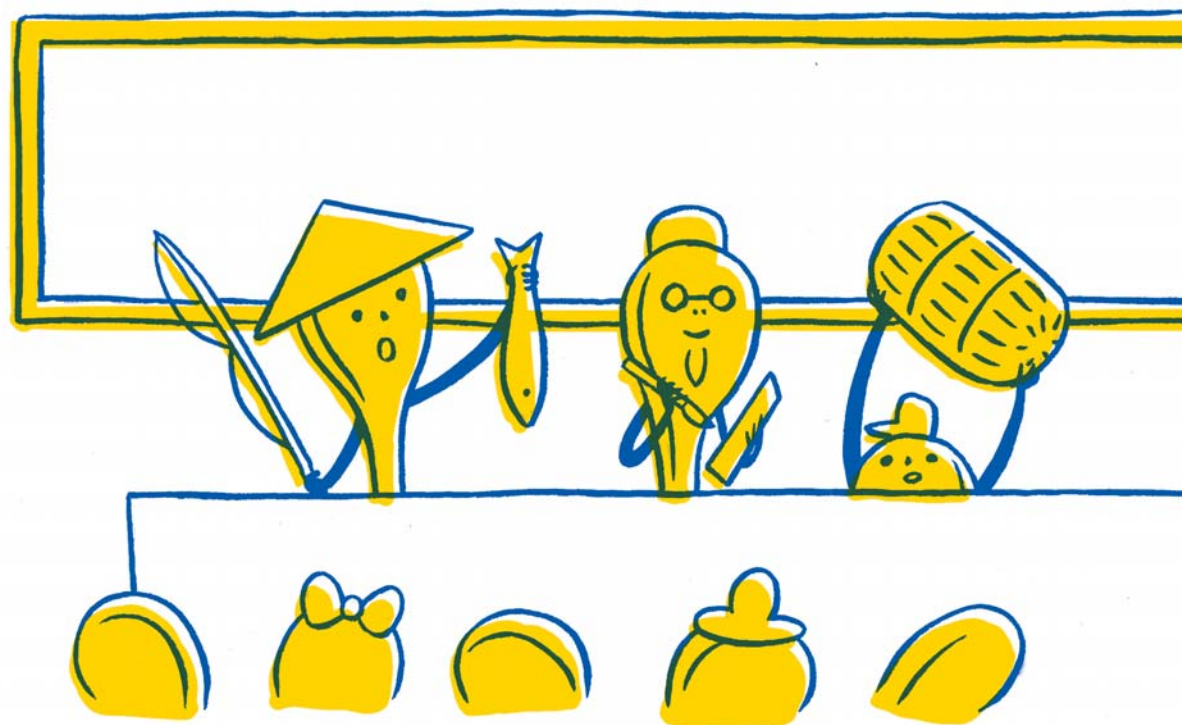
学力低下や体力低下が全国的な問題になっている昨今、海士町も例外ではありません。今まで教育や子育ては、学校や教育委員会にまかせきりにしてきましたが、共働き家庭や島での子育てに不安を持つ親のためにも、もっと地域ができることがあるのではないかと考えました。

例えば、スポーツや部活、習い事などが保育園から高校まで一貫して続け

られるような体制の整備や、海や山、島の自然の中で存分に遊べる環境の提供、地域の中で生きる力を養えるよう、地域文化の継承や地域の手伝い、働く体験をする機会を増やすなど、学校単位ではできない横断的な支援が考えられます。

こうした活動をするためにも、保護者や地域、学校との連携を進めるための仕組みづくりが大切です。また、子育てが終わった世代にも、地域で子どもを育てるんだ、という意識を持ってもらうことも重要です。お年寄りに子どもとの接点を持ってもらうことは、お年寄りにとっても、生きがいにつながるかもしれません。

地域が支える学校づくり。島全体で子育てをすることで、海士町への愛郷心も育てていきたいものです。



# 22 進学もスポーツも あきらめない。 魅力ある島前高校をつくろう。



島前高校の入学者は年々減ってきています。平成20年度の入学人数は28人。入学人数21人を切ると統廃合の問題も浮上してきます。子どもがいる家族の流出を防ぐためにも、島前高校の存続は重要な課題です。

島の子どもたちが島外の高校へ進学する大きな理由。それは、大学への進学です。島前高校からでも国公立大学を狙えるようならば、島に残る生徒も増えるはず。例えば、特進クラスや補習部、土曜補習など、生徒の進学希望を実現できる体制づくりが必要です。

また、他の高校にはない、島の特色を活かした高校にしていくことで、島内はもとより島外からも生徒が集まる島前高校をつくることができます。例えば、ヨット、ダイビング、カヌー、船舶など海を活かした授業や活動ができるようにしたり、福祉やものづくりを学べるコースをつくるなどが考えられます。その他にも寮を使った交流や、島外からのスポーツ合宿の誘致など、できることはたくさんあります。

魅力的な高校づくりは、UIターンする人にとっても、子育ての不安を解消できるメリットです。だからこそ、地域の声を高校運営に反映してもらえよう、高校と地域が連携できる仕組みづくりを考えていく必要があるのです。

**?** 用語解説  
松江の高校へ進学した場合の費用…松江市内の高校に進学した場合にかかる3年間の費用  
約400～500万円

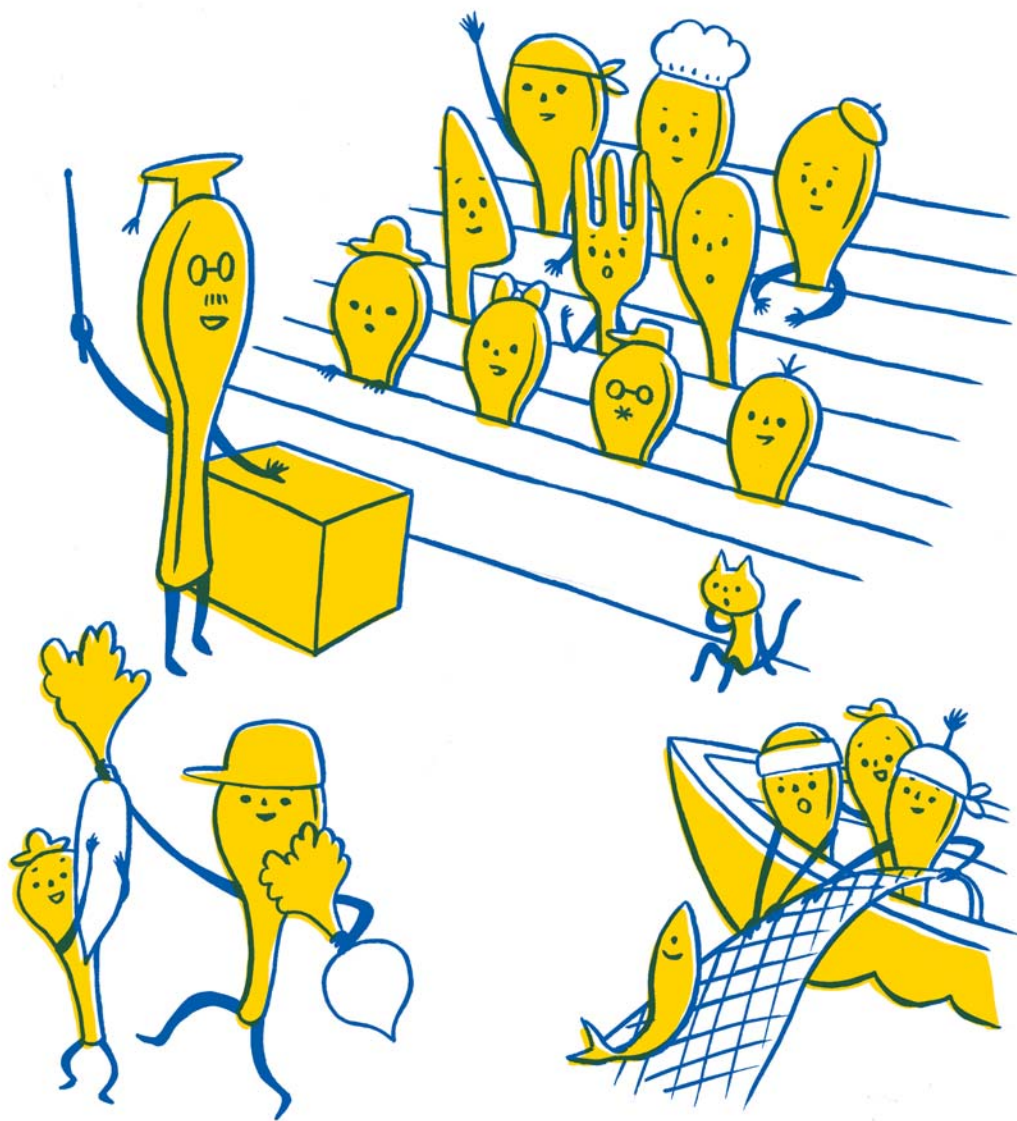
1人でできること

10人でできること

100人でできること

1000人でできること

# 23 海士を学ぶことは、 海士に生きる喜びを知ること。 海士大学に入学しよう。



海士の暮らしの中で生まれ、伝えられてきた技術や文化は、訪れる人々に感動を与える私たち島民の財産です。そんな海士らしさを再発見し、学ぶことは、海士を知る喜びとともに、海士らしい人生の楽しみ方を学ぶことにも通じます。

海士町では、10年前から島全体を大学に見立てた「カレッジ開校事業」を展開してきました。ここでは、農林漁業から伝統文化・歴史、食やスポーツまで、様々な分野における達人を発掘・育成し、「後鳥羽人材バンク」という達人リストを制作したり、達人の技や海士の自然や歴史、伝統を生かしたカリキュラムをつくってきました。

こうした海士に眠っている伝統や技といった文化資源を掘り起こし、体験することは、住民にとって、海士の魅力を意識化する作業でもあり、新たな観光資源や産業のアイデアの源にもなります。さらに、島外の参加者を募ることにより、学びという共通の体験を通して、人材交流や海士ファンを増やすことも期待できます。

海士の誰もが先生になり生徒になれる海士大学。海士に生きる楽しみを学びの中から見つけてみませんか？学びからはじまる可能性を存分に味わってください。

## 参考事例

シブヤ大学（東京都渋谷区）…東京都渋谷を大きな大学に見立て、市民が参加できるさまざまな講義を行っている。

「講師の心.com」……………さまざまな分野の講師を検索できるサイト

1人でできること

10人でできること

100人でできること

1000人でできること



# 24 あなたの活動を応援します！ 海士まちづくり基金を つくろう。

この本で紹介したアイデアや、これからみなさんが新たに提案するまちづくりを実現していくためには、具体的なしくみやサポートが必要です。そこで、まちづくりの輪を海士町全体に広げていくために、「海士まちづくり基金(仮)」を創設したいと考えています。

この基金は、住民の手による「誰もが海士で幸せに生きることにつながる活動」に対して、個人または、団体に助成を行います。時代と島のニーズに対応した課題を取り上げ、生活、自然、福祉、教育、文化などの幅広い領域にわたって、継続的に取り組む活動が対象です。助成内容は、「お金」「ひと」「もの」などから選べるようにしたいと考えています。

この基金の運用や助成先の決定は「海士まちづくり基金検討委員会(仮)」が担います。委員会は、海士町の現状を知る住民をはじめ、公益性を担保するための行政の代表者、公平性を担保するための外部の専門家などで組織する必要があります。また、住民を対象とした幸福度調査の実施なども考えています。

まずは基金を運営する委員会の立ち上げ、基金のしくみをつくる必要があります。それには、多くの住民の協力が必要です。この本を片手に、海士町で幸せに生きるための第一歩を一緒に踏み出しましょう。



## 参考文献

『第四次海士町総合振興計画 島の幸福論』 海士町発行